

ルーブル美術館の模写画家について

伊藤慶之助

巴里のルーブル美術館には、毎日模写をする画家が約七十名ほど居る。

その画家の国籍も種々雑多で、それ等の画家の模写の方法は約三種類に別けることが出来る。

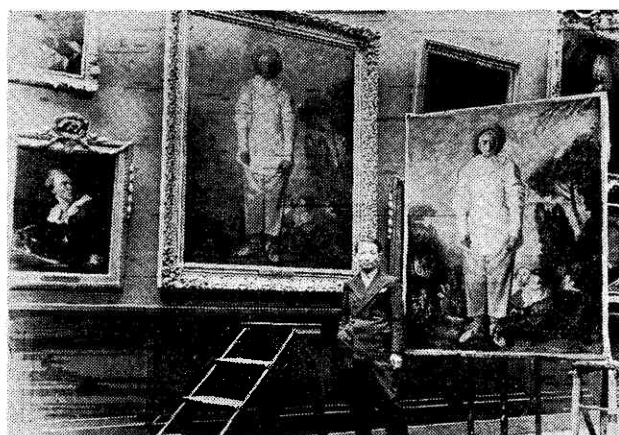
その一は、原作の画派のテクニックを詳細に研究して、その画派のその時代の技法を忠実に周到して写す方法である。

第二は、原作の画派の専門的な技法は余り念頭に置かず、原作から受ける感覚、イメージなどをキャッチして、模写の技法は画家の個性を生かした在来のその画家の技法で原作の感覚、イメージを追って製作する。一般に自由模写と称されているが、ゴッホがミレーの「種子蒔き」の原作をゴッホ独自の情熱的な流動したタッチで模写している絵がある。

このミレーの「種子蒔き」は一八五〇年の作で、当時、ブルジョアに対する耕作労働者の抗議として見られ、相当物議を興した作品で、ミレー自身は社会主義的なイデオロギーはなく、フランス、カトリックの宗教心による忍従の精神を表現しようとしたのだが、この作品には内から盛りあがる労働者の精神的な力強さが表出されており、ゴッホはこの盛上る力強さに同感して模写をしたのであろう。

第三の方法は、模写を職業とする人の模写で、ルーブル美術館ではこの職業的模写画家が一番多い。

これらの画家達は、原作の国、画派のテクニックの特質などは考慮せず、外見的に似ている事、大衆の嗜好に合う美しさを考えに入れて、余り時間を掛けずに手の込んだように見せる事が条件になっている。



しかしこの職業的模写画家のうちには、特別な技術を身につけている画家もいる。

六十歳位いのフランス婦人だが、百号以上もある大作をめぐねのたまほどの小さな画面に、強度の拡大鏡を使用して細密に縮小して模写する。十人程の裸婦の全身像が描かれたりしているが、顔の細部などは肉眼では見えない細密描写である。これ等のものは、おもに婦人のブローチやペンダントに使用される目的である。

又、十六、七歳の少女の頃からラファエルのマドンナばかりを模写し続け、七十幾歳になってもまだラファエルのマドンナを一途に模写し続ける根気の良い老婦人画家もいるが、この二人の婦人の模写は国外の観光客に相当の人気を呼んでいる。

又、十五歳位いの少年がフランドル画派の細密画を模写する姿も見られるが、これはめぐまれない職業的模写画家の生活権をにぎるボスが、ほとんど家で描きあげたキャンバスを少年にルーブルに持ち出させ、失敗が目立たないバックなどの一部を描き加えさせて、客を待っている。

当時のルーブル美術館の看守は、第一次欧州大戦の傷痍軍人が多く、中にはこれらの職業的模写画家と提携して、アメリカやイギリスの富裕な観光客を連れてきて言葉たくみに買はせて約束のリベートをもらう。

……これは十四歳の天才少年で、ピカソやマチスでもこの年頃にはこれだけの立派な絵は描けなかった。もちろん売る為の絵ではないが私(看守)が頼めば売ってくれるだろう。今買って置けば将来性のある少年だから、決して損はしない……と売りつけてしまう。

イタリア、ルネッサンスのレオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザやラファエルのマドンナなどは、模写の希望者が輻湊して、一日を時間で四人程に割り当てて、尚三ヶ月程待たねば模写の順番が廻ってこない。

私も昭和四年から七年までの間に、絵の製作の時間をさいて、フランス十八世紀の画家アントアンヌ・ワトー(一六八四—一七二二)の「ジール」(喜劇役者を描いた百号大の油絵)を手始めに、スペイン十八世紀の画家フランシスコ・ド・ゴヤ(一七四六—一八二八)の「扇子を持つ婦人」(一八〇〇年頃の作。油絵四〇号) フランス十八世紀の市民の庶民的な家庭生活をモチーフとしたジャン・パプチスト・シメオン・シャルダン(一六九九—一七七九)の「メロンと桃」十号の静物、フランス十九世紀のカミュ・コロ(一七九六—一八七五)の「青衣の女」(一五号変型油絵) コロの「ミューズ」(八号油絵) フランス十九世紀古典派の画家ジャン・オーギュスト・ドミニック・アングル(一七八〇—一八六七)の「オダリスク」の顔(ローマ滞在中一八一四年作)などの模写をやった。

ルーブル美術館の模写家について

私の模写は、模写の種類その一にあげた原作の画派の技法を詳細に知って、その時代の技術を忠実に写す方法によった。

十七世紀十八世紀のスペイン画派は画派のテクニクとして、カンバスの上に渋いライトレッドの地塗りをほどこしている。ライトレッドは滲透性の強い顔料だから、顔や肉体の部分や、明るい白い部分などには下からの滲透をふせぐ為に、その上にさらに明るい色で下塗りを重ねておく。この明るい肉体の部分の浮彫の様に絵具を盛上げている画家もある。

この下準備の地塗りが完全に乾いた上に、筆触にリズムをつけて濃淡を考慮しながら筆を進めてゆく。透けた白布の場合、絵具の淡く着いたところは下塗のライトレッドの暖かい暗さが透けて見えて布のデリケートな抑揚が現れる。

スペイン画派のこの世紀の画家ベラスケス、グレコ、ゴヤ、リベラ、ムリリョ、スルブラン、バイユーなどのどの作品を見ても、この画派の法則を守って渋いライトレッドの下塗りをほどこしてから、所定の方法で絵を完成してゆく。

マドリッドのプラド美術館に陳列されているゴヤの「五月三日の処刑」は三百号に近い大作だが、画面全体を暗いライトレッドで厚く下塗りがなされている。そして銃殺されるマドリッド市民の両手をあげる白いシャツの人物と、画面の中央に明るく光る龕燈はホワイトの厚いパートで盛上げている。

その上に、荒いタッチで一気に描きあげられているが、ことに沖天に大きく広がる夜空は、暗いライトレッドの下塗りの上に、絵具を生で溶いたウルトラマリンを乱暴なタッチで画面に流している。透明なウルトラマリンの絵具の下にライトレッドの茶が解合って深い夜空が現出されている。死んでたおれている人物の頭から流れている血は下塗りの茶と鮮紅がまざって、せいよんな感じをあたえる。

私はスペイン旅行によって、スペイン画派の法則を学び得たので、巴里に帰ってルーブル美術館のスペイン派の壁に陳列されているゴヤの「扇子を持つ婦人」の模写に掛った。

原作と同寸法の四十号のカンバスに、ライトレッド、ルミノールとカドミウム、グリーン、ペールを少し加へた茶で下塗りをやり、顔と腕の肉体の部分はその上に明るい肌色で、中高に浮彫のように盛上げて下塗に重ねておく。胸や腕の肌の透けて見えるレースの白い衣装は、ていねいにその下塗りを生かして色をつけてゆく。私は約四十日掛けてこれを完成させた。

イタリア、ルネッサンスのベニス派の絵には、濃いコバルトかウルトラマリンの下塗りの絵をよく見かける。完成された原作を下から見上げる

ように透かして眺めると、画面全体にコバルトの調子が掛って見える。

ルネッサンスのベニス派のジョルジョーネの「田園の合奏」を、ウルトラマリンの青い下塗りの上に模写を始めている老年の画家を見たが、この絵はルーブル美術館でも大作に類する作品である。

この様にルーブル美術館には、多数の画家が毎日それぞれ自分の信じる方法で黙々と模写を続けている。十九世紀の大家マネ・ドガ・ルノアール・セザンヌなども青年時代にはルーブル美術館に通って、多くの模写をやっている。

一九三〇年に巴里で模写ばかりを集めた展覧会が開催されたが、十九世紀フランス画壇の大家の青年時代に、ルーブル美術館で描いた模写が多数陳列されていた。

ルノアールの模写したドラクロアの「アルジェール女」(フランス十九世紀室)、アンリ・マチスの模写したシャルダンの「あかえ」(フランス十八世紀室シャルダンの壁)、フランス十九世紀室に陳列されているドラクロアの「ダンテの船」は二百号位いの作品だが、セザンヌとマネが共にこれを六号に縮小して模写していた。

十七世紀のオランダ派の風景画家、ヤコポ・ルイスダール(一六三〇頃—一六八二)の「荒天の海」を青年時代のアンリ・マチス(一八六九—一九五四)が原作のオランダ派のテクニクを忠実に使って模写した絵も陳列されていた。

一八九四年に模写されたと記されていたから、マチスの二十六歳に描かれたもので、ベルリンのハンス・ピュールマンのコレクションとなっていた。

又、ルーブル美術館フランス十八世紀シャルダンの壁には、シャルダンの静物画「あかえ」「桃」「銀の湯呑」「喫烟道具」「メロンと桃」など多くの優れた作品が陳列されているが、十九世紀中葉から二十世紀にかけて静物を描く画家は、シャルダンのこれ等の絵を指針として多く模写された。

マネ、セザンヌ、ボナールがシャルダンの「桃」を三人見分けのつかない程、忠実にシャルダンの技法に従って模写していたのには興味をおぼえた。

ルーブル美術館の模写家について

ルーブル美術館で模写を始めようとすると、私達の場合は日本大使館の身許証明をもらってルーブル美術館の事務局に行き、模写の料金を支払って指定の許可証に画家の写真を張ってサインをもらう。

それを持って希望の作品の陳列されている室に行き、その室の責任看守に模写する作品と時間を打ち合せて一ヶ月分の看守へのチップを渡す。

翌日から指定した時間に行くと、模写する作品の前に画架にのせた私達のキャンバスが置かれており、終って帰ると倉庫に運び入れてくれる。春の観光シーズンには、画架の周囲に色々の国の人が来て話しかけられるので閉口する。

ルーブル美術館は、始め、ルイ・オーギュスト時代（一二〇四）に築かれた城砦を、フランソア一世（在位一五一五―一五四七）の頃にルネッサンス風宮殿に改築され、アンリ四世（一五五三―一六一〇）時代に立派な宮殿に完成された。

後に一七九三年、時の共和政府によって博物館とされ、現在のルーブル美術館となった。

（挿入写真　ワトー「ジール」を模写する筆者）